

封印された漫才

——相声「統一病」と作者何遲の受難

弓 削 俊 洋

1. 運命を変えた漫才
2. 1956年の光と影
 - (1) 「巨大な希望をはらんだ年」
 - (2) 「早すぎる」
3. 画一化された社会への諷刺
4. 迫りくる嵐
 - (1) 「周揚批語」
 - (2) 「陳 文」
5. 反右派闘争
6. 終わりに

1. 運命を変えた漫才

中華人民共和国の歴史、とりわけ反右派闘争(1957年～58年)から文革(1966年～76年)にいたる20年間は、政治闘争による犠牲者を不断に生み出した歴史にほかならない。たとえば「右派分子」としてこの歴史の当事者となった作家・従維熙は、「もちろん、転変きわまりない歴史の血痕は、私にだけ残されているのではない。民族のために尽くそうと志を立てたにもかかわらず、逆にその志のために煉獄の苦しみを嘗めることになった、この時代の知識分子全体に残されているのである」¹⁾と語り、中国の知識人の体験した苦難の普遍性と悲劇性を強調する。以下で取り上げる何遅も、そんな知識人のひとりとして「煉獄の苦しみ」を嘗め尽くした作家である。

何遲（ホー・チー）。1920年北京生まれ、満州族。

日中戦争の勃発とともに革命に参加し、1938年延安抗日軍政大学入学、1942年入党、以後晋察冀抗敵劇社で伝統劇や喜劇、さらに漫才（相声）の創作や上演に関わる。

1949年「解放」後は活動の場を天津に移し、1954年から56年にかけて、「猿を買う」²⁾、「会議狂」³⁾、「今晚七時から」⁴⁾などの漫才をたて続けにヒットさせ、「漫才作家」としての地位を確立する。これらの漫才の成功は、天津市戯劇家協会副主席、戯曲学校校長等の要職に就き、天津演劇界の重鎮であった何遲に、新たな栄光を付け加えた。

しかし順調だったかれの人生も、1957年に始まる反右派闘争を境に一変し、「反党反社会主義」の「大右派」という批判、党除名・公職追放・給与停止の処分、さらに労働改造農場への下放と、大きく暗転していくのである。1日16時間に及ぶ強制労働、6個の蒸しパンとわずかな大根の煮込しかない食事、過労と栄養不足による体重の激減、数度にわたる昏倒……、そうした生活にあって唯一「自分がなお生きている」と実感できたのは、蒸しパンに含まれているトウモロコシの粒を噛むときだけだった、と何遲は回想する⁵⁾。

60年代初め「右派」というレッテルは一旦はずされるものの⁶⁾、文革の嵐が再びかれを闘争の舞台に引きずり出し、「元」右派分子は、反右派闘争時よりもさらに激しい迫害を受ける。その結果下半身不随となったかれは、寝たきりの生活を余儀なくされ、10時間以上も続く全身痙攣や、床ずれでただれた皮膚に巢喰う無数の南京虫に苦しむ毎日をおくる。

1979年、他の右派分子と共に「平反（＝名誉回復）」されるが、とりついた不幸はかれの体から離れようとはしなかった。平反からわずか3日後、医療ミス⁷⁾で右手を複雑骨折し、その後遺症のためにペンを持つ力さえも失なったからである⁸⁾。

1981年1月、この何遲の漫才「統一病」が、芸能専門誌『天津演唱』に掲載

封印された漫才

された。以下は、作品の前に付された編集部「按語」である。

この漫才を何遲同志は1956年に創作した。しかしそれは公開されないうちに“社会主義を敵視”する“大毒草”とされ、そのために作者も“右派”と断罪されたのである。20年余りも禁圧されていたこの作品を掲載して、広範な読者や作家たちの鑑賞と批評に供したい⁹⁾

20年余りも公開されることのなかった「統一病」。「社会主義を敵視する大毒草」と批判されたこの漫才こそが、「右派分子」何遲の最も大きな罪状となつて、20年以上に及ぶ迫害と、満身創痍の身にかれを追い込んだ作品なのである。

小論は、作者何遲の運命を変えた漫才「統一病」について考察したものである。

2. 1956年の光と影

(1) 巨大な希望をはらんだ年

「統一病」は、1956年の中国社会に題材をとった漫才である。

この1956年について劉賓雁¹⁰⁾は、「人民共和国の最良の年」、「巨大な希望をはらんだ」、「黄金時代」と記し、その主たる理由として「社会主義的改造」が「意外なほど順調に進んだ」ことをあげている¹¹⁾

1949年に建国された中華人民共和国は、1953年8月、毛沢東の提起した「過渡期の総路線」、すなわち「工業化と、農業・手工業・資本主義的商工業に対する社会主義的改造を基本的に実現する」¹²⁾という方針のもと、社会主義への道を歩み始める。

このうち社会主義的改造は、農地や農機具の私的所有を廃して共同所有とする農業の社会主義化、さらに商店や工場の実質的な国営化による商工業の社会主義化などを具体的な内容としていたが、当初その実現には「かなり長い期

間」, 少なくとも15年は必要だと考えられていた¹³⁾ところが1955年後半から全国的に繰り広げられた「社会主義的改造運動」によってその期間は大幅に短縮され, 1956年9月の中共八全大会では「すでに基本的になしとげられた」と報告されるに至っている¹⁴⁾

たとえば首都北京では1月1日から大運動が展開され, わずか10日後にすべての企業, 商店の国営化に成功し, 1月15日には20万人の市民が参加して「社会主義改造勝利祝賀大会」が天安門広場で開催されている。以下天津(18日), 上海(20日), 全主要都市(1月末)と進み, 3月末には全国規模で商工業の社会主義的改造が達成された。

この一つをみても, まさに燎原の火のように社会主義的改造運動が全国に波及していったことが分かるし, それゆえにまた1956年の中国が熱狂的な雰囲気にも包まれていたことも容易に想像がつく。

社会のこのような熱気は当然文学界にも反映し, 「1月15日午後——最初に社会主義へ到達した都市のために歓呼する」¹⁵⁾「社会主義革命の高潮の中で」¹⁶⁾「輝く未来のために, いっそう馬力をかけろ!」¹⁷⁾など, 社会主義的改造の成功を祝う作品が『人民文学』や『文芸報』などの誌面を飾った。

以下は, 当時発表したルポ「1月10日北京にて」に関する劉賓雁の回想である。

その年の初めから, 全国の都市は熱気に沸き返り, ドラや太鼓を打ち鳴らして街頭を練り歩き, 資本主義商工業の社会主義的改造の完了を祝賀した。1月14日, わたしの執筆した記事が『中国青年報』の第1面に掲載されたが, その記事は「本日, 北京の前門外のある資本家は梯子を登り, 自分の店の屋号を記した看板を取りはずした。その看板は数10年前に自分自身で取り付けたものだった」という書き出しで始まっていた。そして, 末尾に, もはや資本家ではなくなったことを心から喜んでいる数人の資本家の詩を掲げていた。わたしは, 当時, 資本主義が中国で平和裡に消滅したことを一大壮挙であると考えたし, はては『資本主義は中国で消滅した』

という本を書きたいとさえ考えたのである。¹⁸⁾

ルポ「橋梁工事現場にて」「本紙内部ニュース」などで中国社会の暗黒を剔抉し、それゆえ後に「右派分子」として指弾される作家劉賓雁でさえも、このように考えさせる雰囲気、当時の中国には存在していたのである。

しかし「統一病」の作者何遲はそのような雰囲気に対して、他とはまったく異なる感想を抱いていた。

(2) 「早すぎる」

1956年1月18日に商工業の社会主義的改造を終えた天津では、さっそく「社会主義実現慶祝会」が開催された。参加した何遲によれば、会場の民園体育场には一千発の爆竹と百以上のドラが鳴り響き、天を轟かすかのような賑やかさであったという。しかしその中であってかれはひとり苦笑を浮かべ、心のなかで「早すぎる」とつぶやいていた。

帰宅後、この「早すぎる」の具体的内容を整理したという何遲は、農業の社会主義的改造について、次のような問題点を指摘する。

農村の改革や農民の意識の発展段階は地域によって大きく異なり、ある地域ではようやく地主の土地を没収し小作農に分配する「土地改革」が終了したばかりである。そのような地域で土地の共有化を含む社会主義的改造を行うことは、分け与えたばかりの土地を農民から奪うものであり、かれらの土地への愛着を無視した政策だ。

したがって「土地を統一し、会計を統一し、作物を統一し、労働の負担を統一し、さらに作業の開始と終了時間を統一」する社会主義的改造は、農民を「土地の主人ではなく一つの労働力、合作社の責任者に指導され支配される労働力」に追いやり、かれらの労働意欲をそぐ結果しか招かない、時期尚早の政策なのだ。

次に都市の商業に対する社会主義的改造についても、「まったく不便になった」以外は何ももたらしていない、と何遲は考えた。

たとえばかれの家の近くには、2軒の西洋料理店があり、以前は夜中の2時

に行っても営業していた。ところが国営化されてからは、昼 11 時から 2 時までと夕方 3 時から 7 時までに、営業時間が短縮されてしまった。近所にはまた深夜営業のチャーハン屋があり、安くて旨いうえにスープを無料で付けてくれたが、この店も国営化されて昼間だけの営業に変わり、味も落ち、スープのサービスもなくなってしまった。さらに、大きなレストランには必ずあった看板料理も消え失せて、どこも同じような料理しか出さなくなるなど、社会主義的改造後の飲食店では、質やサービスが著しく低下してしまったのである。

こうした状況は飲食店だけにみられたのではない。天津市民の憩いの場だった銭湯も、バラエティに富んだ営業項目（爪切り、垢擦り、洗体、水虫治療など）が姿を消したために客が激減し、多くは旅館へと衣替えしてしまった。この他お茶の葉も、店によって違う味が楽しめなくなった。各店に任されていた仕入先や精製法を「統一」され、その結果味も「統一」されてしまったからである。

以上のように、あまりにも性急に、そしてまたあまりにも徹底して「統一」が行われた結果、社会主義的改造が庶民の生活にもたらしたものは「不便さ」だけだった、というのが何遲の見方であった。そして、こうした認識のもとに書かれたのが、「統一病」という漫才なのである。

社会主義は「統一」とイコールではない。社会主義とは、ひとりひとりの個性と、個々の部門の積極性が(中略)、最も発揮される社会であるべきだ。(中略)社会主義すなわち統一、という観点は誤りである。これこそ私が一篇の漫才を書き、それに「統一病」と名づけた理由にほかならない!⁹⁾

3. 画一化された社会への諷刺

上の引用から分かるように、漫才「統一病」は、「画一化」された社会への諷刺を意図した作品である。そしてこのテーマを強調するために、作者は、重症の「統一病」患者の男を主人公に据える。

男の「病歴」は幼少期に始まるが、成人後はさらに「統一学」の研究に励んだため、「病状」はいつそう悪化する。その最大の被害者が家族であり、かれらはまず男の好きな色の青で「統一」される。家族全員が青色の服、帽子、靴、靴下、下着、手袋を身につけ、家中の壁、テーブル、椅子、タンス、棚、急須、茶碗、電球までもすべて、青で「統一」されるのだ。

次に家族の行動も「統一」され、

朝は6時、「リーン」、全員起床。

6時10分、「リーン」、洗顔。

6時20分、「リーン」、トイレ。

昼の12時、「リーン」、昼食。

12時10分、「リーン」、食べるのやめ！……

といった調子で、起床から就寝にいたるすべての動作が、男の鳴らすベルの音に合わせて行われるのである。

そんな男が百万都市の市長になったことにより、被害者は一気に膨れ上がる。かれは最初に全市を百区→一千町→一万組→十万户に分割したうえで、人間も含めたすべての名前を数字で表すように改める。したがってそこでは手紙の宛名も「甲区、9号町、35組、3,462戸、34,658号人収」と書かねばならない。

かれの市ではまた百貨店が「一貸店」に分割され、すべての市民はひとつの品物をひとつの店で購入するように「統一」されている。そのため歯ブラシと歯磨き粉を違う店で買い、散髪・髭剃り・洗髪・ドライヤー・整髪もそれぞれ別の店に行かねばならない。

文化面でも「統一」は進み、新劇・バレエ・京劇・評劇・越劇・オペラ・歌舞伎などを一体化した「統一劇」が創作され、市内にある10の「統一劇団」はすべて同じ脚本脚色で完全に「統一」された「統一劇」を上演するようになった。

さらに市民の行動も家族同様「統一」され、市役所内の放送室から送られる合図に合わせて行動するよう義務づけられた。その徹底ぶりは、軍隊さえも及ばないほどであった。

しかしそれでもまだ男は満足できない。というのも人間の顔と体の「統一」が残っているからだ。

この難事業を達成するために市では特別プロジェクトチームを作り、「統一薬」を開発する。この薬を服用させて、人間の顔形を「統一」しようというのである。一部の市民（全員が美男美女）はこれに抵抗するが、説得や刑罰による脅しを受け、最終的には服用を承知する。

こうして、某月某日の午前零時、市長の号令に合わせて全市民が一斉に「統一薬」を飲み、8時間後には同じ顔、同じ体つきをした「統一人間」が誕生する。ところが、親兄弟や夫婦の間でさえも、他人との区別がつかなくなり、全市は大混乱に陥った。

そこで今度は「統一解除薬」を開発して全市民に飲ませるものの、ただ一人主人公の男だけが元に戻ることができなかった。市民全員に服用させる際、自ら模範を示すため、2倍の量の「統一薬」を飲んでいたのである。

以上のようにこの作品は、人間の顔までも「統一」しようとする主人公を通じて、社会主義的改造の行き過ぎを批判し、画一化ではない社会主義、いわゆる「人間の顔をした社会主義」を文字どおり主張するのである。それは当時の中国においては鮮烈な主張であり、仮に舞台に掛けられたならば、大きな反響をよんだにちがいない。

しかし冒頭でも紹介したように、結局この作品は公開されないまま20年以上も眠らされることになる。それには当時の党中央宣伝部副部長・周揚が、決定的な役割を果たすのである。

4. 迫りくる嵐

(1) 「周揚批語」

1957年1月、何渥は、完成した「統一病」の原稿を北京の『曲芸』編集部²⁰⁾に送る。折り返し届いた編集部からの返事には掲載承諾の旨が書いてあり、そ

のままであれば「統一病」は、『曲芸』創刊号（2月28日発行）に発表され、同誌が初めて掲載した漫才として名を残すはずだった²¹⁾

しかし何遲はその名誉に与ることを自ら辞退する。党员である自分が他の多くの人と「政治的観点」を異にする作品を発表してよいのか、という不安にかられ、発表するのを躊躇したからである。

そこでかれは『曲芸』編集部宛に、作品の返却を求める手紙を出す。その直後に返送されてきた原稿には、編集部はとてもいい作品だと判断し、すでに『曲芸』創刊号への掲載も決定済みだった、という内容の手紙も添えられていた。

こうして「統一病」は絶好の発表の機会を逃すのであるが、問題はその後起こる。

1月29日、何遲は、返却されたばかりの原稿を、党中央宣伝部あてに送付した。時宜に合わない部分があれば、宣伝部の指導者によって指摘・是正してもらおう、というのが理由だったが、かれのこの「慎重」な行動は思わぬ結果を招くのである。宣伝部副部長周揚²²⁾に原稿が回され、彼の手によって次のような「批語」が加えられるからである。

某某同志：万障お繰り合わせのうえ、必ずこの漫才をお読みください。私は、社会主義的改造と都市政策とを中傷した、非常に悪い作品だと思う。もしこれが発表されたならば、私たちが個性を消滅させ人民を束縛している、と、敵が宣伝する格好の材料になるだろう。現在の社会に対して、作者がなぜこのように反感を抱くのか、私には理解できない。しかも『曲芸』編集部は、この作品をしっかりと立場に立っているとみなし、発表するつもりであるという。ここから文芸界の一部の同志たちの思想的混乱を見いだすこともできる。いかに処理すべきか指示を乞う²³⁾

正に全面否定であるこの批語が、「実質上は文化・思想部門の政治的最高責任者の地位」²⁴⁾にあった周揚によって書かれたとき、作品と作者の運命も決まったといえる。事実、6月に始まる反右派闘争では、この「周揚批語」の線に沿っ

て、「統一病」と何遲に対する批判が行われ、以後22年もの間、何遲の人生を「金縛り」にするのである。

私は余りにも幼稚だった。党の規律を遵守し、“好ましくない”影響を与えるのを防ぐために、自ら進んで上部機関に審査を申請した。しかしそれは、自分で自分を“売る”ことに他ならなかった。それによって私は、“極悪非道で許すことのできない”“右派”、“修正主義分子”、“反党集団の首領”とされたからである。このように自分から進んで網にかかる愚かな人間は、私以外にはいないだろう²⁵⁾

党中央宣伝部への「審査」の「申請」、余りにも大きな誤算となったその行動を省みて、30年後のかれはこう言う。しかし1957年4月26日付の手紙²⁶⁾に、5月10日から長春に行き、「8月には、論文と漫才とを執筆する予定です」と書く当時の何遲は、迫りくる嵐にまだ気づいていなかった。

(2) 「陳 文」

自分を襲う災厄に何遲が気づくのは反右派闘争開始後のことであるが、実はその半年前の1月、嵐の「前兆」をかれは経験していた。『人民文学』7月号に掲載された4月26日付の手紙（註26参照）には、漫才の執筆予定とともに、次のような事実も記されている。

“陳文”（陳其通など4人の書いた文章を指す——編集者）が『人民日報』に掲載されると、天津でも一陣の寒風が吹き、人々を震えあがらせたものです。漫才など“笑わせるもの”は死に瀕していました。（中略）当時わたしは天津の王蒙²⁷⁾になったかのようにあり、作家協会天津分会からの脱退もやむなし、といった雰囲気でした。

ここで言う「陳文」とは編集部の注にもあるように、1957年1月7日付『人民日報』に発表された「文芸工作の現状に対するいくつかの意見」を指す。陳

其通や馬寒氷など²⁸⁾強硬な「左派」文化人たちによって書かれたその文章は、「社会主義リアリズム」堅持の立場から、社会諷刺の作品に対して厳しい批判を加えたものであり、しかもそれが党中央機関紙『人民日報』に掲載されたために、当時の文芸界に大きな衝撃と影響を与えた。

上掲4月26日付の手紙は、この「陳文」発表（1月7日）後に、「専ら諷刺の作品を書く作家」²⁹⁾何遲を取り巻く状況が急速に悪化したことを示しており、「統一病」の発表を躊躇させ、また中央宣伝部に原稿の「審査」を「申請」した（1月29日）のも、「陳文」とそれ以後の状況とを考慮したからだと考えられる。

もっともこうした状況は、「毛主席が間接的に私に対する包圍討伐を解いてくださった」と書くように、2月27日と3月17日に行われた毛沢東の二つの演説³⁰⁾以後「少し好転」している。

さらに、4月下旬からは、このふたつの演説に基づいて、党内の「官僚主義やセクト主義」を一掃する「整党」と、党への率直な批判を党外人士に奨励する政策が、党中央によって押し進められた。その結果、民主党派の指導者を中心に、政府・党機関の官僚主義、さらに「党の天下」「独断先行」に対する批判や注文が出され、それらが党機関紙に多数掲載される³¹⁾という「雪解け」現象も生まれてくる。

後に毛沢東はこの政策が「右派」をあぶりだすための策略だったと主張するのだが³²⁾ともかく4月下旬、何遲を取り巻く環境が表面的には好転していたことはまちがいない。だからこそ26日付手紙の最後に、5月10日からの長春行きと、8月以後の執筆予定を、かれは書けたのである。

しかし5月15日、毛沢東は、論文「事態は変化しつつある」³³⁾を執筆して、党内での反右派闘争の発動を指示し、18日この指示を通達された³⁴⁾周揚など文芸界の指導者は、6月8日の公然化³⁵⁾に向けて、反右派闘争の準備に着手するのである。

このように目まぐるしく変わる情勢のもと、「統一病」は、作者と『曲芸』編集部、さらに党中央宣伝部のあいだを転々とし、最終的には周揚の手に落ちる、

という最悪の状態のなかで、反右派闘争を迎えるのである。

5. 反右派闘争

7月末、何遲は、天津市党委員会の講堂で開催される集会へ出席するよう通知を受ける。

当日、何遲をはじめ市の主だった文芸関係者を前にして、集会の主催者は、「右派が党を攻撃中で、党内にもそれに呼応するものがある」と指摘した上で、突然「統一病」に言及し³⁶⁾「市外の同志も批判すべきだが、やはり天津市自身の手で解決しよう」と檄を飛ばした。この時点で「統一病」に対する批判が初めて公然化し、何遲は、自分の作品が闘争の矢面に立たされていることを知る。

その数日後、戯劇家協会と美術家協会との共催によって別の集会が開かれた。前回は「警告」のための集会だったが、今回は「闘争会」であり、多くの「革命的大衆」が、机を叩き、椅子を放り投げ、恐ろしい形相をして何遲に「自白」を迫ったというが、この「闘争会」でもやはり、攻撃の矛先は「統一病」に向けられていた³⁷⁾

そして12月、「統一病」の掲載予定誌だった『曲芸』の副編集長陶鈍³⁸⁾が、何遲批判の文章を『文芸報』に発表する。「何遲は誰を笑おうとしたのか？」と題するこの論文もまた、「統一病」への評価を軸に、作者何遲を激しく非難するものだった。少し長くなるが、陶鈍論文から関係部分を引用する。

人々は熱狂的に社会主義を迎え入れたのだ。しかし党内の異分子何遲は、この大変革に対して敵視する態度をとり、漫才を使ってデマを飛ばし、中傷したのである。かれは、いかなる所にも存在しておらず、これから先も永遠にありえないことを描き出して、社会主義的改造が全てをだめにした、と主張するのだ。(中略)

いまここで何遲に宣告しよう。(中略) おまえはすでに悪の深淵に陥り、ブルジョアの代弁者、人民共和国に潜入する帝国主義と台湾国民党の秘密

工作人員になりはてた。(中略)人民は、この毒草がこれ以上伸びるのを決して許さない!³⁹⁾

このような漫罵が、かつては同じ作品を褒め、創刊号への掲載まで決めた雑誌の編集者から浴びせられる、という異様な状況に、当時の何遲は直面していた。その中でかれは、「おれは正直すぎたから、こうなってしまったのだ」、「『統一病』を送ったのは審査を受けるためだ。発表もしていないのに、どんな影響が与えられるというのだ!」という不満を抱きながらも、結局「自己批判」を書き、「統一病」が「反党的作品」とであると認める。何遲によればそれは、「罪」を認めることで批判を最小限度にとどめよう、という目論見からの行動であった。

しかしこの「自白」以後、かれへの批判は逆に激化し、労働改造農場への下放、家族への迫害(妻への批判、及び何遲との離婚を要求される)、母の「自殺」(未来のない息子の負担とならぬよう、絶食して死亡)、さらに「統一病」を演じる予定だった漫才師馬三立への弾圧⁴⁰⁾と、悲劇の輪は広がっていった。

6. 終わりに

この反右派闘争後も、数えきれないほどの不幸が何遲を襲う。なかでも、文革中の「数年に及ぶ暴力」⁴¹⁾による下半身麻痺と、「文革」後の医療ミス(註7参照)による右手の麻痺は、復活後の活動に大きな困難を強いることとなった。

それでも何遲は「口述筆記」⁴²⁾という方法でこのハンデを乗り越切り、1979年以降、「第二の青春を迎えた」⁴³⁾と言われるほどの活発な創作活動を展開する。「どこかで会った人」⁴⁴⁾「誇り高い女」⁴⁵⁾「新局長の着任後」⁴⁶⁾などの新作漫才や、本稿で度々引用した自伝(33万字、424頁)などを、その代表作としてあげることができる。

だがこうした旺盛な創作意欲にもかかわらず、かれの漫才について言えば、「猿を買う」のような話題作や、「統一病」のように鮮烈な主張をもった問題作

を、再び生み出すことはできなかった。⁴⁷⁾「もっとも充実していたはずの時代」⁴⁸⁾に遭遇した反右派闘争と、その10年後に起こる文革とは、作家としての無限の可能性を、何遅から奪ってしまったのである。

もちろんその責任を周揚ひとりに負わせるつもりはないが、それでもやはり、かれの果たした役割を曖昧にすることもできない。この点について何遅は、文革後の周揚が、自分の推進した文芸政策に対する自己批判や被害者たちへの謝罪を繰り返す行い、何遅にも人を介して詫言を入れてきた事実(註22参照)を指摘したうえで、そんな周揚の態度が「私の心を和らげ」、かれに対する「わだかまりを解いた」と書く。

しかしその一方で、批語については漫才の特徴を理解しない「あまりにもぞんざいな」評価だと批判すると共に、「私が“右派”のレッテルを張られ、18年ものあいだ半身不随となって床に臥しているのもすべて」、かれのもたらした「大きな幸福だ」と皮肉り、周揚に対する複雑な思いを隠そうとはしない。

このように「統一病」に端を発した受難の日々は、多くのものを何遅から奪い、また多くのものをかれに残したのである。それだけに「統一病」に対する何遅の思い入れは強かった。1991年1月26日に逝去する、かれの「遺書」となった『自伝』に、「統一病」の全文を掲載し、作品にまつわる詳細な証言を行っているのも、この作品に対する自負と、それが「毒草」と批判され、いわれなき冤罪を引き起こしたことへの無念さを、伝えたかったからに違いない。

以上のような事実を重ね合わせて「統一病」を読んだとき、その「人間の顔をした社会主義」という主張は、「転変きわまりない」人民共和国の歴史を生き抜いた、ひとりの知識人の悲痛な叫びとなって、われわれに迫ってくるのである。

註

- 1) 従維照著／柴田清継訳『ある「右派」作家の回想』(学生社 1992年1月10日) P2
- 2) 『買猴兒』(1953年作)。何遅の代表作。主人公の名前「馬大哈」が「間抜け、いかげんな人間」の代名詞となる、「你真是個馬大哈!」「你又辦了一件馬大哈事兒!」等の流行語を生む、1956年には『文芸報』が三回にわたって誌上討論を行う(趙樹理、老舍、侯宝林等が

封印された漫才

寄稿)など、大きな反響をよんだ。資料として以下のものがある。

① 台本

- ◎『何遲相声創作集』(中国戲劇出版社 1982年5月)
- ◎何遲原著/馬三立改編『買猴兒』(宝文堂 1955年3月)
- ◎『買猴兒』(天津通俗出版社 1955年9月)
- ◎『劇本』1955年3月号
- ◎余孽主編『相声芸術入門』(北京廣播学院出版社 1992年6月)等。

② 論文

- ◎拙稿「相声『買猴兒』の世界」(啞啞之会『啞啞』21・22合併号 1985年12月25日)等。

③ 『文芸報』での誌上討論

- ◎『怎樣使用諷刺的武器——对于相声《買猴兒》的討論』(『文芸報』1956年第10号, 12号, 13号)

3) 『開会迷』(1955年作)

① 台本

- ◎『何遲相声創作集』(前掲)
- ◎『人民文学』1956年8月号
- ◎『開会迷』(天津人民出版社 1956年10月)

② 論文

- ◎拙稿「相声『開会迷』と雑誌『人民文学』」(中国文芸研究会『野草』第38号 1986年9月10日)

4) 「今晚七点開始」(1956年作)。『何遲相声創作集』(註2①参照)所収。

5) 何遲口述/胡孟祥主編/王天頤・陳建平・何良記錄整理『何遲自伝』(東方説唱芸術系列叢書 中国民間文芸出版社 1989年11月)

6) 1961年9月、「右派」のレッテルがはずされ、天津市戯曲研究室研究員として仕事に復帰、「高人一頭的人」(『人民文学』1963年3月号)などの作品も創作している。しかしその間も「レッテルをはずされた右派」として種々の差別を受けた。64年より「四清運動」に動員され、そのまま66年の文革を迎える。

7) 名誉回復から三日後、入院先の病院で、右手を無理に捻り上げられる「強制治療」を受けて、複雑骨折した。麻痺していない上半身の「運動」を目的にした「治療」だったが、苦痛を訴える何遲を無視して、それは行われた。さらに骨折後も必要な処置が施されないまま翌日まで放置され、その結果どんなに力を振り絞っても十文字以上は書けない、という後遺症を右手に残した。その後も厳寒の日に暖房が故障したまま一晩放置されて、急性肺炎を起こ

す「事故」に遭った（『何遲自伝』P 389～391）。

- 8) 以上の何遲の経歴は、『何遲自伝』（註5参照）のほか、「走過的脚印——我的簡歷」（『何遲相声相声創作集』所収 註2①参照）、『中国芸術家辞典』現代第一分冊（湖南人民出版社 1981年3月）、『中国文学大辞典』第五卷（天津人民出版社 1991年10月）等による。
- 9) 『天津演唱』1981年1月号P 2
- 10) 劉賓雁（1925～）。党の官僚主義を批判したルポ「在橋梁工地上」（『人民文学』1956年4月号）、「本報内部消息」（『人民文学』1956年6月号・10月号）などの作品により、反右派闘争で「右派」とされた。
- 11) 『劉賓雁自伝』（鈴木博訳 みすず書房 1991年8月15日）
- 12) 毛沢東「党在過渡期総路線」（1953年8月）。『毛沢東選集』第5巻（人民出版社 1977年4月）所収。以下、毛沢東の論文、講話は全て同書所収。
 なお社会主義的改造と、四章二節中の中共党の政策についての叙述は、『新中国紀事 1949—1984』（東北師範大学出版社 1986年2月）、李谷城編著『中国大陸政治術語』（香港中文大学出版社 1992年）、安藤彦太郎編『現代中国事典』（講談社 1972年12月28日）、『現代中国の歴史 1949～1985』（有斐閣 1986年12月10日）、『中国近現代史』下巻（東京大学出版社 1982年7月8日）などを参考している。
- 13) 「過渡期」の期間については当初、「かなり長い期間」（前掲毛沢東論文）、少なくとも「十五年あるいはもう少し長い期間」（毛沢東「反对党内的資産階級思想」1953年8月12日）が必要だと考えられていた。
- 14) 劉少奇「中国共産党中央委員会向第八次全国代表大会的政治報告」（1956年9月15日）。日本国際問題研究所中国部会編『新中国資料集成』第5巻（日本国際問題研究所 1971年12月）に邦訳を所収。
- 15) 田間「一月十五日下午——為第一座進入社会主義的城市歡呼！」（詩 『文芸報』1956年第2号 1月30日）
- 16) 『人民文学』1956年3月号（3月8日）に特写・散文特集〈在社会主義革命高潮中〉として以下の九篇を掲載。
 ①王汶石「風雪的夜」 ②崔璇「在区委会里」 ③海黙「從城里来的姑娘」 ④何澤沛「移山填海的人」 ⑤楊朔「把永定河水引進首都來！」 ⑥遼斐「冬季，農村即景」 ⑦李准「歡騰的鄉村」 ⑧碧野「察汗通溝一日夜」 ⑨任幹「走上新路」
- 17) 馬鉄丁「前途似錦，快馬加鞭！」（散文 『文芸報』1956年第2号 1月30日）
- 18) 『劉賓雁自伝』（註11参照）P 75
- 19) 『何遲自伝』（註5参照）P 260
- 20) 『曲芸』創刊号（通俗読物出版社 1957年2月28日発行）の奥付には、編集者：曲芸編集

封印された漫才

部（北京王府大街64号）、主編：趙樹理、副主編：陶鈍と記されている。

- 21) 『曲芸』創刊号には結局、伝統相声「蛤蟆鼓兒」（孫玉奎述）の一部が掲載された。
- 22) 周揚(1908年～1989年)。評論家。中共中央宣伝部副部長、文化部副部長、中国文連副主席、中国作家協会副主席等を歴任。

なお、『何遲自伝』では、周揚の名前を伏せて中央宣伝部の「指導者（領導同志）」あるいは「××同志」とのみ記している。

それを周揚と断定したのは、当時かれは中央宣伝部副部長の職にあり、「実質上は文化・思想部門の政治的最高責任者」（註24参照）として、その言動が巨大な影響力をもっていたこと、さらに、これが決定的なのであるが、『何遲自伝』の中に以下のような一節があることによる。

「党の十一期三中全会以後、××同志は、会議の席上幾度となく自己批判を行い、文芸界の多くの人々の理解を得た。また××同志は、人を介して私に対する“挨拶”を送ってきた。」（P 281）。

文革後に周揚の行った自己批判は大きな反響を呼び、様々な文献で触れられているが、1989年周揚死去の後に発表された追悼文では次のように記されている。

「党の十一期三中全会以後、かれは、歴史の経験を総括するなかで、厳しく自分を律し、三十年代からの工作上の誤りに対して常に自己批判を行ってきた。またかれは、自分の工作に関連して不適切な批判と扱いを受けた同志に対して、誠実に謝罪してきた。こうしたかれの精神と気概は、人々から尊敬を得た。」（『周揚同志生平』『文芸報』1989年第36期 9月9日）

この追悼文の内容は、前掲『何遲自伝』と完全に照応している。

以上、①1957年当時に中央宣伝部の「指導者」であった、②「党の十一期三中全会以後」公の場で自己批判を何度も行った、③被害者たちへの謝罪をした、④これらによって文芸界の人々から「理解」を得た、という条件を満たす人物は周揚以外には見あたらず、「××同志」は周揚だと断定できる。

- 23) 『何遲自伝』（註5参照）P 281
- 24) 丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国近現代文学事典』（東京堂 1985年9月30日）「周揚」の項（P 113）。
- 25) 『何遲自伝』（註5参照）P 280
- 26) 「何遲的来信」（1957年4月26日付『人民文学』1957年7月号）
- 27) 王蒙(1934～)。『人民文学』1956年9月号に、党機関の官僚主義的体質を批判する小説「組織部新来的青年人」を発表し、賛否をめぐって激しい論争を引き起こした。
- 28) 「我們対目前文芸工作的幾点意見」（『人民日報』1957年1月7日）は、陳其通、陳亜丁、

- 馬寒氷、魯勒の四人の連名で発表された。
- 29) 陶鈍「何遲是要笑誰？」(『文芸報』1935年第35号 12月8日)
- 30) 毛沢東「關於正確處理人民內部矛盾問題」(1957年2月27日)、「在中国共产党全国宣傳工作會議上的講話」(3月12日)。前者は最高國務會議第十一次(拡大)會議(2月27日)、後者は党全国宣傳會議(3月6日～13日)での講話。
- 31) 章伯鈞(農工民主黨)、章乃器(民主建國會)、儲安平(九三學社)など民主黨派の指導者のほか、文芸界からも批判が続出し、党の「指導」に不満を唱える碧野、舒蕪、姚雪垠、陳白塵などの文章が『人民日報』に掲載された。なおこの時期の党批判(邦訳)は、内閣官房内閣調査室編『中共 人民内部の矛盾と整風運動』(大蔵省印刷局印刷発行 1957年10月)に多数集められている。
- 32) 毛沢東『文匯報的資產階級方向应当批判』(1957年7月1日)
- 33) 毛沢東「事情正在起變化」(1957年5月15日)
- 34) 蕭乾著／丸山昇ほか訳『地図を持たない旅人』(花伝社 1993年2月25日)下巻VII章二節 訳註26では、5月15日付毛沢東論文は、18日に文芸界の指導者に伝えられていたとあり、黄秋耘『風雨年華』から、次のようなエピソードが紹介されている(P265)。
- 「(18日の晩)文芸界の政治的責任者周揚の片腕だった邵荃麟を訪ねていた黄秋耘は、「百家争鳴」の状況を明るく語っていた邵荃麟が、周揚からの突然の電話を受けると、「変わった」という一言を残して、あわてて出ていった事実を証言している。」
- 35) 反右派闘争は、1957年6月8日付『人民日報』社説「這是為什麼？」の発表によって公然化する。
- 36) この集会では、「統一病」と「關於繁榮創作的幾句話」(隨筆『新港』1957年6月号)の二編の文章が問題にされた(『何遲自伝』P282)。
- 37) この集会の目的は、①「統一病」への批判、②「反党集團」組織への批判、の二つであった(『何遲自伝』P282)。
- 38) 陶鈍(1901～)。作家・曲芸研究者。『曲芸』副主編の後、中国曲芸家協会主席、中国文連副主席等を歴任する。
- 39) 陶鈍「何遲是要笑誰？」(註29参照)
- 40) 馬三立(1914～)。1954年、張慶森とのコンビで漫才「買猴兒」を演じ人気をよぶ。「開會迷」「今晚七點開始」を含め、50年代の何遲の主要作品は殆どかれの持ちネタであり、「統一病」もそうなるはずであった(作品中で漫才師「甲」は馬三立と指名)。しかし何遲とこのように「親密」な関係は、反右派闘争から文革に至る迫害を招いた(劉連群著『馬三立別伝』P200～266「“買猴兒”篇」百花文芸出版社 1991年4月)。
- 41) 文革で、「大右派」「反動學術權威」「反革命修正主義分子」「現行反革命」など六つの「罪

封印された漫才

- 状」をきせられた何遲に対しては、昏倒するまでこめかみを殴り続ける(1966年)、壁に向かって立たせ、両手を水平に上げたままの姿勢で「取り調べ」をする(1967年)など様々な暴力が加えられ、それは1969年後半に半身不随となるまで続いた(『何遲自伝』P 350, P 353~354, P 358など)。
- 42) 註5『何遲自伝』は、何遲口述／王天頤・陳建平・何畏記録整理、註8「走過的脚印——我的簡歷」は、何遲口述／張国賢記録、註44「似曾相識的人」、註45「高貴的女人」、註46「新局長到来之后」の三篇の漫才は、何遲口述／李光記録整理によるもの。
- 43) 陳笑暇「一息尚存、決不停筆——緬懷何遲」(『曲芸』1991年第8期)
- 44) 「似曾相識的人」(1979年作)。馬三立・王風山のコンビで初演。『曲芸』1979年第11期、『何遲相声創作集』(註2参照)に台本を収録。
- 45) 「高貴的女人」(1980年作)。蘇文茂・馬志存のコンビで初演。『説演彈唱』1980年第2期、『何遲相声創作集』(註2参照)に台本を収録。
- 46) 「新局長到来之后」(1980年作)。蘇文茂・馬志存のコンビで初演。『曲芸』1980年第10期、『何遲相声創作集』(註2参照)に台本を収録。
- 47) そのため観客の反応もいまひとつで、たとえば「高貴的女人」のラジオ放送を何度も聞いたという武井克己氏によれば、「観客の反応は鈍く、笑いが少なかった」そうだ。武井克己編『漫才でつづる中国の世相』(恒文社 1987年6月30日)。なお同書には、「高貴的女人」の翻訳も収める。
- 48) 前掲『漫才でつづる中国の世相』P 146